

川入遺跡

所在地 北区川入
時代 中世

調査期間 20260108～20260115
調査面積 14.3㎡

調査地点の概要

調査地点は、県道245号真金吉備線の西側に当たり、その位置は、「おかやま全県統合GIS」の「文化財情報」によれば、「川入遺跡」の範囲の北東端部にあたります。川入遺跡は吉備の中山の南西、足守川西岸の平野上に弥生～中世にかけて形成された集落遺跡です。山陽新幹線の建設や道路拡幅に伴う発掘調査では、弥生時代の集落や、官衙的性格を持つと推測される掘立柱建物群などが確認されました。

今回の調査は、道路拡幅に伴い令和8年1月8日～15日にかけて行いました。

調査の結果

調査地点の調査前の状況は宅地であり、その標高は2.0m付近です。現地表面から－20～50cmは現代の造成であり、コンクリ片や暗渠の土管などが混ざります。

その下には標高0.8～1.2m付近まで灰黄～黄灰色のシルトや粘質土である第1層から第5層が堆積しており、これらの中には周囲と土質の異なる土がブロック状に堆積します。須恵器、土師器の細片が若干混入することから、中世以前の造成土層と考えられます。

中世以前の造成土の下、標高0.9m付近までは、灰黄色粘質土である第6層が堆積しており、これは層序や堆積状況より遺物包含層と考えられます。層内からは若干の土師器・須恵器・備前の細片が出土しています。

その下、標高0.8～0.7m付近に広がるオリーブ褐色の砂質を帯びた粘質土層である第7層は、約30～40cmの厚さで堆積します。北に若干下がっており、土器細片がわずかに含まれます。この層は相対的に若干安定した状況を呈し、層上にはわずかながら遺構(SP1)が形成されているところから遺構面と判断されます。その時期は出土遺物より中世と考えられます。

その下、標高0.6～0.5m以下は、粘質～粘土層である8～10層が堆積します。これらは無遺物層で、第10層は下方に行くに従い徐々にグライ化していくようです。

まとめ

今回の調査では、中世段階に遺構面が形成されていたことが確認されました。包含層中の遺物から14世紀頃と考えられますが、標高も低く、遺構密度はかなり疎で、また基盤層の下は湿地状堆積であることから、集落の末端に位置するものと考えられます。そして中世以降近世に至るまでの間に周辺部では70cm以上地上げが行われ、宅地化されたと考えられます。



図1 調査位置図 (1/2500)

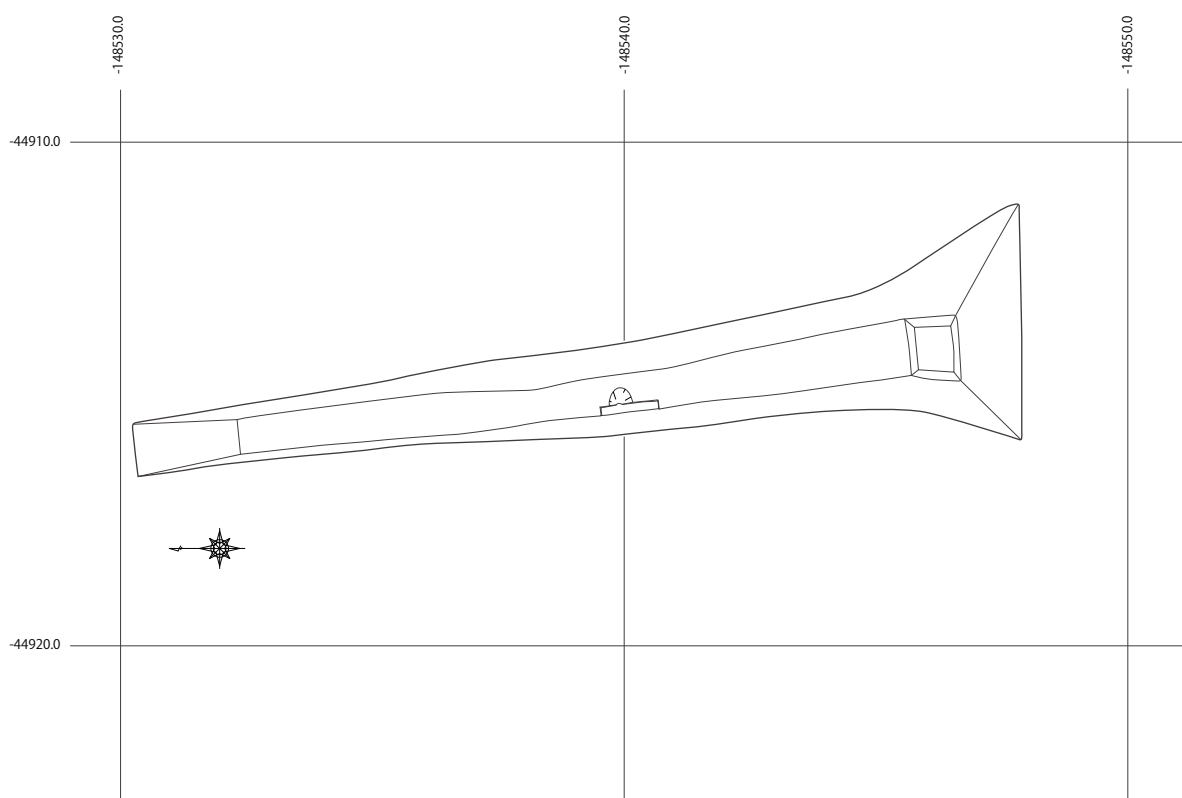


図2 平面図 (S = 1/150)

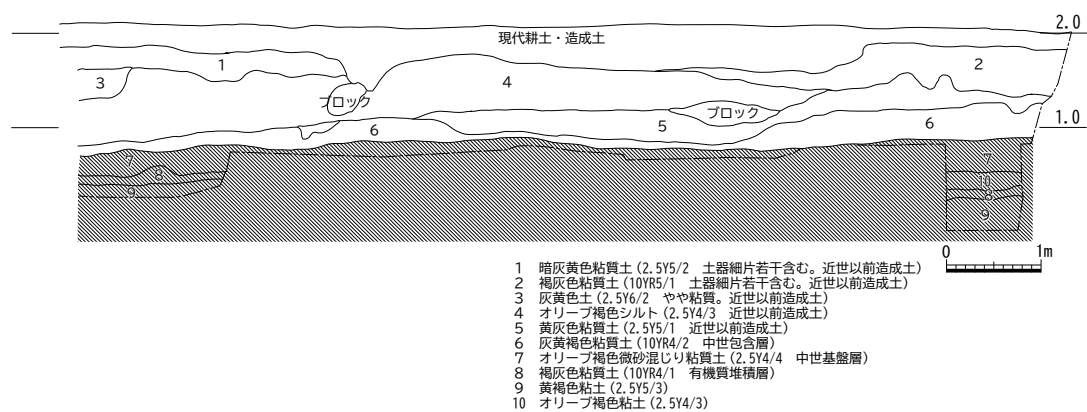


図3 断面図 (S = 1/80)